

芋地蔵

木村三千人



吉十郎のお墓 上浦町瀬戸・向雲寺



嘉永3年(1850)建立の「芋地蔵」碑。大三島町宮浦・大通寺

嘉永三年(一八五〇)八月一日に、越智郡大三島町宮浦の大通寺境内に、一基の碑が建立された。
正面には地藏像の下に「古岳獨釣信士・芋地蔵・瀬戸吉十郎」、右側に「嘉永三戌八月朔日」左側には「寶曆五乙亥年」と刻まれている。

これは「寶曆五年八月一日に瀬戸村で、吉十郎という方が亡くなった。この方は『いもじぞう』と呼ばれていた人で、戒名を古岳獨釣信士という。没後九五年目の嘉永三年にこの碑を建立する」という意味である。

この碑を最初として、吉十郎をまつ「芋地蔵」が建立されていく。

嘉永三年(一八五〇) 大通寺
同 四年(一八五二) 上浦町宝珠寺
同 五年(一八五三) 同・坊と好味

同 七年(一八五四) 伯方町善福寺
安政二年(一八五五) 同・禪興寺
同 四年(一八五七) 大三島町・薬師堂

万延元年(一八六〇) 同・昌福寺

このうち安政二年は、吉十郎の没後一〇〇年にあたる。すなわちこれらの芋地蔵群は、吉十郎の没後一〇〇年を記念するものであったというわけだ。

では、この吉十郎という方はどんな人で、なぜ「芋地蔵」としてまつられたのか。

サツマイモの原産地は熱帯アメリカで、古くからバルサ材の筏に乗った人々によって太平洋の島々へ伝えられている。これはイモが航海食として優れた性質をもっていたからで、逆に言えばイモがあったからこそ、この古代の航海が計画されたともいえる。

やがてコンブス以降、イモは航海食として船に積み込まれ、世界を駆けめぐる。

そのイモが最初に東洋に届くのは、太平洋側からルソンへであった。この品種は、味はいいが収量が少ないもので、中国から琉球を経て、瀬戸内の島々へも伝えられる。そのころ、大三島の瀬戸に吉十郎が生まれた。当然吉十郎もそれを食べたであろう。

ところがイモにはもう一つ別の品種があつて、こちらは大西洋が原産地である。これは収量が多くて腐りにくく、主食に適したものである。

そのイモはヨーロッパから、遙々とアフリカの南端を通って東洋に伝えられ、中国から琉球を通り薩摩へとやって来る。

おりしもそのとき、吉十郎は全国行脚の六部の旅すがら、薩摩へと足を踏み入れる。

みると、これまで自分が食べたイモとはちがったイモがあるではないか。聞いてみるとつい六年前に伝えられたものだという。

これは先のイモとはちがって、収量が多くおまけに腐りにくいという。そこでそのイモの種をもらって郷里へ届けた。

しかしそのころ、薩摩は国境の警戒を厳重にしていたので、このイモが藩の外に出ることは稀であった。たまたま吉十郎が六部の行者であったことが幸いした。

イモは水気が少ない土地を好むので、島はまさにその適地である。それまでの畑作は秋から春にかけての麦作が中心で、夏のあいだはダイズやアズキなど、主食にはならない作物をつくっていた。ところがイモが入ってきた



吉十郎が六部の旅に持っていた「法華經」上浦町・浅海家蔵



吉十郎の没後100年を記念してまつられた位牌
伯方町木浦・禅興寺

ことによって春から秋にかけても畑は活用され主食の量は倍増する。そのおかげで、当時全国的な悪習であった「間引」はなく、赤ちゃんはみんな元気に育っていった。

そのころの島の人口ピラミッドを見ると、赤ちゃんの数が最も多く、健全なピラミッドを形成している。

吉十郎さんは当時としては稀な八十二歳の長寿に恵まれて、寛暦五年八月一日に亡くなり村の向雲寺の後ろの丘

の頂上に葬られた。

墓碑には「古岩獨釣」「下見吉十郎」「寛暦五乙亥八月朔日」と書かれている。

最初に書いたように、「芋地藏」という表現は吉十郎の没後二〇〇年を中心とした前後十年のあいだに生まれたものののだ。それは、吉十郎さんのイモのおかげで、全国的な悪習である間引から逃れることができた親たちの感謝の結晶であったと考える。

芋地藏については『芋地藏巡礼』（図書刊行会）『さつまいも史話』（創風社出版）に詳しく書いた。それはここ大三島に生まれた者として、自分の命の源をたどる営みであった。もし吉十郎さんのイモがなかったら、私の先祖の赤ちゃんが間引きされていたかもしれない。すると私は生まれてはいなかった。それは島人たち全てにいえることなのだ。

郷土史の研究は、自分の命の源を見つめる営みといってもいいであろう。その一例がこの芋地藏なのである。

きむら・みちこ 大正十一年生まれ。今治中学・愛媛師範学校卒業。小・中学校教師。退職後愛媛県文化財保護指導員・愛媛県生涯学習推進講師。大三島を中心とした郷土史に興味をもち『芋地藏巡礼』『鏡と矛』『海道の絵馬』『さつまいも史話』ほか著書・編著十二冊。